

女子大学生の援助希求能力と阻害要因健康

市ノ瀬菜々¹⁾，井上文夫²⁾

1) 明石市立大久保小学校 2) 京都女子大学心理共生学部

キーワード：援助希求能力、インターネット依存、社会性、自己肯定感、阻害要因

【目的】困ったときに誰かに助けを求めるかどうかは、本人が自由に選択することであり、必要以上の助けを求める必要もない。しかし、持続する悩みは、時にうつ病や自殺などの深刻な問題につながることもある。本研究は援助を求めないあるいは求めることができない人たちの実態について把握し、それらに当てはまる対象者に向けたアプローチ方法と援助希求能力を育成するための方策について考察することを目的とした。

【方法】18 歳～22 歳の女子大学生を対象に、2023 年 10 月上旬～11 月下旬に、Google フォームで作成した質問紙調査を行い、117 名から有効回答を得た。

質問項目は、援助希求、インターネット依存度、社会性、自己肯定感に関する質問から構成された。インターネット依存度は Young の Internet Addiction Test (IAT)、社会性は菊池の KiSS-18、自己肯定感はローゼンバーグの自尊感情尺度の日本語版を使用した。

【結果】普段、悩みを相談することが多い（とても多い・どちらかといえば多い）と回答した者が 53.8%であり、少ない（とても少ない・どちらかといえば少ない）と回答した者が 46.1%であった。少ないと回答した対象に、その理由を尋ねたところ、相談相手に負担をかけたくない（56.4%）、人に弱みを見せたくない（40.0%）、諦めている（20.0%）、頼める人がいない（10.9%）、助けてもらおうのが恥ずかしい（10.9%）と続いた。悩みを相談することに抵抗があると回答した者が合計で 52.1%であり、悩み事があるとき自己解決したいと思うと回答した者が 81.2%であった。

自己肯定感、社会性、インターネット依存度に

ついて、相談頻度間で一元配置分散分析と多重比較をおこなった。インターネット依存度において有意差が見られ、相談頻度が「とても多い」と「少ない」の間に有意差が見られた。また、自己肯定感と社会性においては相談頻度間で有意差は見られなかった。相談抵抗感の間での比較では、インターネット依存度との間には関連は見られなかったが、自己肯定感と社会性では有意差が見られ、自己肯定感や社会性が高い者では相談することに対する抵抗感は低い結果となった。

【考察】本研究では、社会性が低い者は、相談することに対する抵抗感が高く、悩み事があったときに自己解決をしたがる傾向にあり、援助希求能力が低いと考えられた。その理由として、他者とのコミュニケーションが上手くいかない場合、相談相手を探すことに労力を費やさなければならず、そのことが負担になると考えられ、援助要請のプロセスで、潜在的援助者の探求の段階で困難を抱える可能性が高いと考えられた。また、相談という行為にたどり着いたとしても、社会性の低さから要請の評価の段階で失敗に終わる可能性も考えられた。勇気を出して相談したにもかかわらず、上手く話すことができず、さらに問題が深刻になった場合、さらなる援助希求能力の低下を招くことが推測される。従って、援助希求に対する抵抗感を除く上で、援助者の適切な対応は重要と考えられた。

【文献】永井智：大学生における援助要請意図
教育心理学研究 58 (1), 46-56, 201